

愚痴をこぼす坑夫たち

——宮嶋資夫『坑夫』論

矢口 貢 大

1 はじめに——坑内に響く声

下層社会への変装取材を得意としたジャーナリスト・知久泰盛（峽雨）は、一九一二年、古河財閥の経営する足尾銅山への潜入取材を試みている。「足尾銅山鉱夫となるの記」⁽¹⁾によれば、坑口を潜るとそこには、カンテラの灯が「厚ぼつたい闇に圧へつけられるやうで光線の乏しい赤い焰が燃えるばかり漸く足元が見える」世界が広がっている。カンテラ一つを頼みに闇に覆われた別世界を歩むなかで、知久の聴覚は研ぎ澄まされていく。知久の筆がそこで記録するのは、坑内に響き渡る様々な種類の音である。鉱山電車の「轆轤の音響」、圧気機の「足元も岩天井もぶる／＼顫へるやうな轟音」、^{（かつかつ）}「耳を澄してゐると下の方でも横の方でも幽かに憂々と石を切る音」が響き、時折ダイナマ

イトの「頭上の岩天井が崩るかと思ふやうな大爆音」が空気を激しく振動させる。そして無機質なこれらの音の合間を縫うように、鉄槌の「憂々」^{（かつかつ）}という音で拍子を取りながら、坑夫たちは唄う。

アー坑夫様とはヨー知らずに迷うたヨー
と唄うと、他の一人は
やろやツたな

と囃やす。次に唄の下の句を続けて

アー聞けば奥山ヨードント坑^{あな}ずまるよー、やろやツたな、ア、
ずん／＼

（知久泰盛「足尾銅山鉱夫となるの記」）

さらに「いくら叩いても、穴づりとれぬ石が堅いのかドント手の業か」といった悲調の唄や「足尾だるまと古河様は穴をほらしてドント金を取る」といった猥雑な唄まで、知久の筆は丹念にそれを記録していく。本書には、こうした「寂莫たる坑内に、鉄槌の嚙々たる音響と参差して、この音調を耳にする時は、無味殺風景なる坑夫の周囲にも、一種の哀音が漂う」ような風景が印象的に記されている。採鉱現場に響き渡る無機質な轟音の合間に耳を澄ますと、ともすればかき消されがちだが、そこには哀調を伴った坑夫たちの肉声が響いているのである。

また足尾銅山の坑夫からの聞書きという体裁をとった、江見水蔭「足尾銅山坑夫の話」^②には、次のような坑夫の声が書きとめられている。

昼間十二時間穴の中で暮らすのですから、日輪を見る事が出来ぬ訳です。一処に行つた信州と言ふ男が、しみどゝ愚痴をこぼして「こんな事ならあちらに居た方が甘い物が食へて体も楽だ」あちらとは監獄の事です、何んと驚くではありませんか。

（江見水蔭「足尾銅山坑夫の話」）

ここで信州と呼ばれる坑夫は、かつて自身が身を置いた獄中と現在の足尾銅山の環境を比較し、前者の環境の方がまだ楽で

あったと述懐している。信州の発話は、坑夫という立場から、階級的に浮上することの困難な事情もあつて、いかんともしがたい生活の現状を嘆く日常言語のジャンルの一つである「愚痴」として、語り手に分類されている。

哀調を帯びた鉱山節や坑夫の生活を嘆く愚痴は、急速な近代化を推し進めるこの国の産業構造の末端から響いた軋みである。彼らは生活の悲哀を唄い、どうにもならない現実に対して弱々しく愚痴をこぼすことで自らを慰めるほかなかった。

またその一方で、鉱山の外の人間から坑夫は、「人を殺したり、放火をしたり、暴動をしたりする謎の人間」（平沢計七「坑夫の生活」^③）のようにみなされている。粗暴で荒々しい坑夫像も、新聞報道等のメディアを中心に広く流布していた。



足尾銅山鉱夫となるの記

悲哀を込めて鉦山節を唄い愚痴をこぼす弱々しい坑夫と、粗暴で怖ろしい坑夫——こうした鉦山労働者の二面性をつぶさに描出した文学作品として宮嶋資夫の『坑夫』（一九一六年一月、近代思想社）が挙げられる。『坑夫』の登場人物をみると、本作の主人公・石井金次が「世間からは唯兇暴の一語を以て評し去らるべきあの人物」（堺利彦）⁵、「乱暴者として世を終つた」（大杉栄）⁶としてその粗暴さが強調される一方で、それと対照的に他の坑夫たちは「虚偽怯懦権力に媚び、友を売つて恬然たる、無恥無氣力の労働者」⁷として位置づけられてきた。

また『坑夫』をめぐる先行論においては、その粗暴さが強調される石井金次の形象をめぐって検討が重ねられてきた。佐藤勝は、石井金次の行動様式が、都会からの排除、資本家による詐欺、足尾鉦山暴動の敗北と仲間の裏切り、恋の破綻という四つの外在的条件に規定されていることを明らかにしている。そして森山重雄は、石井金次の疎外の構造を「まず仲間を疎外し、次には仲間から疎外され、ついにはかかる自己をも疎外してしまふ」という三段階において把握している。それに対し中山和子は『坑夫』の可能性を「政治と文学」の観点から捉えなおし、石井の「激しい憎悪と軽蔑とを込めた絶望の訴え」¹⁰として位置づけ、同時代における「実行と藝術」の影響を重視する森山との間で論争に発展した。また石井の「沈鬱」の分析を行った中村三春の論考や、千葉正昭による石井金次の「獣性」の分析などの議論が展開されてきた。

一方で石井金次以外の弱々しい坑夫たちのありようは、先行論において後景に追いやられてきたといえるだろう。本論のねらいは、これまで「卑屈」の一言でもつて切り捨てられてきたこれら弱々しい坑夫たちの存在を浮上させ、彼らと石井金次との間でどのような葛藤が繰り広げられたのかを考察することにある。その際に非常に示唆に富むのが、次の黒古一夫の指摘である。

私の判断では、この宮嶋の小説世界における〈日常生活〉の喪失こそ、宮嶋の政治性を反映し、また彼の文学の根幹に横たわる重要なフアクターに他ならないと思うのである。／宮嶋の小説世界の主人公達は、決して〈生活〉を掌中にしていない。彼らは〈日常性〉の環から逃れようとする意志を強固にすることで、その存在を主張するのである。この宮嶋文学の一大特徴は、処女作『坑夫』の主人公の石井金次の造形から始つていえると言える。

（黒古一夫「宮嶋資夫序説——〈日常性〉の喪失」）

黒古の指摘するように、『坑夫』の主人公・石井金次は〈日常生活〉を忌み嫌い、なかば追い立てられるように破滅的な生に身をゆだねている。それでは石井以外の弱々しい坑夫たちの場合はどうか。彼らは必死で日常生活に縋りつこうとし、そうした日常を固守するためには、本作の末尾で描かれるような陰惨

な暴力すらも厭わない存在なのである。そうした日常性への姿勢をめぐり石井とその他の坑夫たちの間には、大きな隔たりがあるのだ。

そして彼らの日常を支え、その悲哀を表白するスタイルこそ愚痴であったのではなかったか。『坑夫』に描かれているのは、坑夫たちの愚痴や不平といった日常言語のジャンルをめぐる闘争なのである。さらに、それは宮嶋の『坑夫』が生まれる母胎となった近代思想社の言語戦術に接続していくと考えられる。以下、考察を試みていきたい。

2 石井金次の言語戦術

『坑夫』の舞台は、常陸にある「池井鉾山」という架空の鉾山である。田上貞一郎の調査によつて、そのモデルは茨城県七会村(現・城里町)にかつて存在した高取タングステン鉾山であったことが明らかになっている。黒古一夫編「宮嶋資夫年譜」⁽¹⁷⁾によると、宮嶋は一九〇九年、数え二四歳の時に「茨城県水戸市郊外で親戚の経営していた高取タングステン鉾山の事務員」となり、翌年鉾山から帰り上京している。タングステンは、軍備拡張に邁進する日本において、兵器製造の側面から特に注目された鉱物であった。豊原信一郎著『タングステンとモリブデン』(二九一六年)⁽¹⁸⁾には、次のような記述がある。

換言せばタングステンを含有するが故に鋼の硬度を増大し、高温度に於てもよく其鋼の碎硬性を維持する特性を有すればなり、且又タングステンスチールは製砲、製艦等兵器の製作上一刻も欠く可らざる極めて重要な材料たるが故に軍器製造工業独立問題の喧伝せらるゝの今日、有識者のタングステン原鉱に注目怠らざる所以の者又以て思ひ半ばにすぐる所あるべし。

(豊原信一郎『タングステンとモリブデン』)

硬度と耐熱性に優れたタングステンは、近代兵器の生産に不可欠な鉱物であった。ことに第一次大戦開戦後、「時局の進展するに従つて兵器火薬の材料品相場は一斉に暴騰」⁽¹⁹⁾することとなる。タングステンを産出する鉾山が高取鉾山も含め国内にわずか四カ所ということもあり、「時局」を鑑みた政府は、一九一五年、突然輸出禁止を命じた⁽²⁰⁾。そうした状況のなかで、タングステン鉾山では労働環境への投資と釣り合わぬ、無理な増産計画が練られることとなる。むろんその皺寄せが向かうのは、末端の労働者である坑夫たちのものであった。『坑夫』には、鉾況が盛んになり、坑夫たちの生活環境の整備がまにあわない飯場の様子がありありと描かれている。

事務所では堀進を急ぐ為に、どし／＼人を増すので、飯場にも長屋にも坑夫は一杯になった。風通しの悪い沢合に建

てられたそれらの家の上を、日中は暑い日が容赦なくかつかと照りつけるので、夜になつても家の中はむん／＼してゐた。そればかりでなく裸のまゝで寝る人達の汗や脂肪を思ひ切り吸ひ込んだ夜具や、周囲の羽目にぶら下げた汚れくさつた仕事衣からは、たえず臭い匂を放つてゐるので、室の中にはむかつくやうないきれが一杯にたゞよつてゐた。生温くほてつた真黒な畳の上に、坑夫等がべと／＼に汗をかいたまゝごろ／＼寝転んでゐる有様は、人間の家と云ふより全く豚小屋に近いものだつた。

『坑夫』

こうした劣悪な生活環境で起臥する坑夫たちの口からは、当然ながら「あゝ畜生ツ苦しくつて寝られやしねえツ」といった愚痴がこぼれる。しかし、これら坑夫たちによる愚痴の合唱に、本作の主人公である石井金次は決して加わらない。なぜなら石井は「毎日同じやうに愚痴や泣言ばかり繰り返してゐる仲間達がごちやごちや集まつてゐる、埃っぽい騒々しい飯場へ帰るのが何よりもいや」だからである。日常的な生活環境への不満を言語化することは、石井にとつてもっとも忌むべき行為として位置づけられているのだ。

本作において、一貫して石井金次は愚痴をこぼさない労働者として造形されている。もっともこうした石井の態度は、自らの不満を言語化する場合に、それを愚痴に分類することをかる

うじて回避することによつて、成立しているのだ。飯場において石井が不満を漏らす、次の場面をみてみよう。

「あゝあ、つまらねえな」思はず大きな声で「石井は——筆者注」怒鳴つた。

「何がよ、兄弟」と側にゐた太つた男がきいた。

「だつてよ、考へて見ねえ、俺たちや何だつて此んな馬鹿げた苦しい目にばかり逢はなきやならねえんだ、蒼くなつて働いてよ、間誤つきや岩に打つつぶされて、雨の降る晩に冷てえ土の中に埋められちまふなんて……それが当りめえの事なのか、鉦主は毎日甘い酒を飲んで美しい女を抱いてやがる……下らねえ端た錢の愚痴なんかこぼす時ぢやねえや。手前達やみんな寝呆けてやがら」とむか／＼する思ひを一ぺんに吐き出すやうに云つた。

『坑夫』

ここで石井は、坑夫の悲惨な境涯を嘆いているが、一見するとこの発話は他の坑夫たちの発話と同様の愚痴に分類されかねない危うさを内包している。しかしそれに続けて、「下らねえ端た錢の愚痴なんかこぼす時ぢやねえ」と、愚痴の発話主体に他の労働者たちを位置づけ、自身の発話をそれと差異化することにより、愚痴をこぼさぬ主体としての卓越した自身の位置を担保しているのである。そしてこの石井の発話は、石井に共犯

的な語り手により、「むか／＼する思ひを一ぺんに吐き出」すといった愚痴ならざる発話として分類されている。

人間が他者に向けて発話をする際になされる、聴き手や話者自身によるその発話のジャンルの分類は、対話において重要な意味を持っている。同じ発話内容であっても、例えばそれが真剣な「抗議」として聴かれた場合と、「愚痴」として聴かれた場合とでは、その発話の価値は大いに異なるだろう。そして社会的に下位に位置づけられる「愚痴」や「泣き言」といった日常言語のジャンルは、往々にして聞くに値しない発話として退けられてしまう。自身の発話がどのようなジャンルに分類されるのか、さらに誰がそうした発話のジャンル分類を担うのか——私たちの日常的な発話の背後では、無言のうちにこうしたジャンルをめぐる駆け引きが進行しているのだ。

そしてこうした日常言語のジャンル分類をめぐる闘争は、『坑夫』の様々な場面で展開されている。石井は、他者の発話を愚痴に分類する役割を積極的に担うと同時に、他の坑夫たちに対し、それらの発話を禁止する主体として機能している。『坑夫』の冒頭で、事務員の顔を蹴って鉦山を出ていくこととなった佐藤に対して共感を寄せる石井は、佐藤が「俺あ誰にも煽てられやしねえ」と否定するにもかかわらず、野田という坑夫を事件の扇動者であるとひとり決める。石井が佐藤とともに飯場に帰ると、野田を含む坑夫たちは「全く此の頃のやうに鉦石の買ひ方が矢筈しくつちや、こちとらとはとてもやり切れねえ。岩片^{ずり}

がちよいと這入つたつちや、二分引く、三分引くつて云はれたんぢや全く働く勢がありやしねえ、第一飯の喰ひ上げだ。一体此の山の現場員なんか労働者を馬鹿にしているからいけねえんだ。佐藤が怒つたなあ当り前だ、なあ兄弟達」と饒舌に喋りたてている。これに対し、石井は次のように挑みかかる。

「お前は随分よく喋舌つて人を煽てるけど、てめへちやまだ何にもした事がねえな」とこんどは攻めるやうに言つた。「だつて兄弟、話をしなけりや判らねえぢやねえか、此頃の鉦量係が余りに酷過ぎるからよ」

「ぢやお前はこゝへ何か愚痴をこぼしや、何うにかなる気であるのか、下らねえ野郎だな、お前達が泣き言をいやあ言ふ程見張の奴等あまだいぢめても大丈夫だと思つて高を括つてら、彼奴らあ何でも癪にさはつたら黙つて睨みつけて、ダイの一本も叩き込んでみる、慄へ上つて云ふ事を聞かあ、お前みたいに人計り煽てたり、見得で理窟を言つたつて何になるもんか、つまらねえ事あよせつてんだ」

『坑夫』

野田の饒舌な発話は、石井によって一方的に「愚痴」や「泣き言」に分類されている。興味深いのは、愚痴の禁止とともに石井の提示する代案が、「癪にさはつたら黙つて睨みつけて、ダイの一本も叩き込」むといった行動的なものである点だ。石

井の野田に向けて提示する枠組みのなかでは、饒舌な愚痴と沈黙を伴う行動とが対置されており、ここに日常的言説をめぐる闘争が展開されている。

佐藤勝⁽²¹⁾は、この場面の石井と野田の対決が「勇氣と怯懦の対立」という倫理的な課題以上のもの——言いうべくんば自覚する少数前衛が大衆密着の情勢優先かという当代における戦術論の見取図を反映するもの——であったとしている。大逆事件以降のいわゆる〈冬の時代〉の戦術論として、近代思想社内部における大杉栄や荒畑寒村に代表される「無政府的個人主義」と、堺利彦の「多数平凡主義」⁽²²⁾との対立があり、『坑夫』にもそうした文脈が流れ込んでいるという佐藤の指摘には説得力があるだろう。しかし、ここで重視すべきはそうした運動の戦術論をめぐる作品外の文脈が『坑夫』という小説に形象化される際に、愚痴という日常言語のジャンルをめぐる闘争として表れているという事実であろう。換言すれば、日常言語をめぐるジャンル分類は、初期社会主義をめぐる主戦場の一つとして認識されていたのである。この近代思想社と愚痴をめぐる問題については、次節で詳しく考察してみたい。

さて『坑夫』における飯場は、坑夫たちの日常生活の愚痴が飛びかうトボスであり、石井はそこに戻ることを避けることで孤立を深めていく。しかし次に引く場面では石井が飯場でこぼされる愚痴への積極的な介入を試みている。

「あゝあ、稼がにやならねえし、借金にやなるし全くいやになつちまうな、——脱走でもしなきゃやり切れねえや」と誰か生ぬるい声でつぶやくやうに言った。

「まつたくよ、此の頃の錢にならねえつたらほんとに酷いな、そのくせ鉦^{かね}は随分出るんだけど」向き合つて寝てゐた男が、勢のない声で合槌を打った。

「なあに、鉦主が一人でうまくやつてるのよ、手前が儲けせへすりや好いもんだから、岩が堅くなるのに間代を下げやがるし、鉦石は矢釜しい事ばかり云やがるしよ、癪にさはる事ばかりだ」

「ストライキでもやらねえかなあ」と誰かが云つたので、皆が笑つた。石井はその時まで黙つてゐたが、「おい皆なもう下らねえ愚痴は止せよ、俺あ聞いてる丈けでも頭が痛くなら、お前達や意気地なし野郎ばかりだから、ストライキでもやらねえかなあ、なんて人ばかり当てにしてやがら、——株つたがりがよく揃つてら」と大きな声で我鳴つた。

『坑夫』

ここで坑夫たちは、搾取を強める資本家に対する不満を吐露するとともに、行動としてのストライキをほめかしている。それに対しそれまで黙つて聞いていた石井は、これらの坑夫たちの発話を「下らねえ愚痴」として位置づけてそれを禁止し、

彼らの他力本願な姿勢を糾弾する。しかし、そこで愚痴をこぼしていた坑夫の一人が、石井に食ってかかる。

「何もお前、愚痴を云ったつて俺達の勝手ぢやねえか」

「いけねえツ、俺あ愚痴を聞くなあ大嫌ひだから止せつてんだ、それでも云ひたきや俺と喧嘩しろツ」と彼れは突然起き上った。然し誰れも相手になる者はなかつた、いやな顔をして苦笑しながら、「まあいゝや、お前一人で威張つてろよ」と誰か云つたがそれきり皆黙つて了つた。やがて一人減り二人減りして皆何処へか出て行つて了つた。

『坑夫』

以上の愚痴をこぼす坑夫たちと石井との対決は、本作における日常的言語をめぐる闘争において重要な意味を持つている。石井は、坑夫たちの発話を一方的に愚痴に分類し、同時にそれを禁止するという戦術をとつてきた。それに対し、ここでの坑夫たちは「愚痴を云つたつて俺達の勝手」と、自らの発話のジャンルをすすんで「愚痴」と位置づけ、その発話の権利を主張するという新たな反応を見せる。すなわち発話のジャンル分類の権能を、石井の手から奪い返すことで、これまでの石井の発話をめぐる戦術に対抗しているのである。

かくして石井は、「愚痴」の代わりに「喧嘩」をすることを彼らに提案する。これは、野田に対してかつて石井が迫つた「愚

痴」をこぼすか、「ダイの一本も叩き込」むかという、言語と暴力の対立軸の反復である。だが自らの愚痴を発話する権利を主張する坑夫に「お前一人で威張つてろよ」と一笑に付されてしまうことにより、石井の提案は空振りしてしまう。石井の提示した「愚痴」か「喧嘩」か、という枠組みそのものが、坑夫たちによつて拒絶されてしまうのである。

こうした石井金次の日常言語に対する闘争の敗北と、それとともになう孤立こそ、石井の殺害という『坑夫』の陰惨な結末を準備しているのである。以上を確認したところで、次節では本作に深く影響を与えていると考えられる雑誌『近代思想』の言説の分析を通して、愚痴をめぐる闘争を別の角度から検証していきたい。

3 『近代思想』と愚痴

『坑夫』は、一九一六年一月、近代思想社から出版された。本書の序文は大杉栄と堺利彦が執筆しており、近代思想社系の人々との密接な関係が窺える。本節では、『坑夫』と近代思想社との影響関係を、日常言語である愚痴の視座から考察する。

一九一二年一〇月、大杉栄や荒畑寒村らを中心に、近代思想社から刊行された雑誌『近代思想』は、大逆事件を経た（冬の時代）のなかで、社会主義者たちの文学を通じた橋頭堡の確立を目指していた。

村田裕和は、雑誌『近代思想』の言説の特徴について、「ひとことといえ、〈介入〉であつた。彼らは文学を過渡的な場所とみなしていたが、それを局外から批評するのではなく、相手のフィールドの一步内側へ入りこんで、そこに亀裂を走らせようとしたのである」と分析している。

ここで興味深いのは、『近代思想』の文壇への〈介入〉が、その創刊号から日常言語である愚痴という切り口からなされていたという事実である。『近代思想』創刊号には、文芸時評として荒畑寒村の「九月の小説」⁽²⁴⁾が掲載されている。そこで荒畑は志賀直哉の「大津順吉」〔中央公論〕一九二二年九月を次のような言葉で評価している。

藝術品として優れた作物である許りでなく、個人の自由、人格の権威の上に積み重ねられた家庭の邪曲に対して、社会的にも個人的にも今迄睡つて居た青年の間にこういふ作の現はれたのは、甚だ面白い意義ある事だと思ふのである。（中略）勿論、安藝者にフラれた愚痴より外書く能のない文士から、異端外道視されるのは承知の上で。

（寒）「九月の小説」

荒畑は、志賀の「大津順吉」を「個人の自由、人格の権威」の側面から評価する一方で、文壇の大勢を占めるのが「安藝者にフラれた愚痴より外書く能のない文士」であることを論難し

ている。ここでの荒畑の批判は、永井荷風、久保田万太郎、小山内薫、長田幹彦らに向けられており、のちの赤木桁平による「遊蕩文学撲滅論」⁽²⁵⁾の論点を先取りしていると言えるだろう。また荒畑は、一九一三年の『近代思想』に掲載された「二月の小説」⁽²⁶⁾においても、文壇に対して「愚痴」という語を用いた糾弾を試みている。

生活が苦しい、家庭が面白くない、家を飛び出して酒を飲む、女を買ふ、そういう生活を描写し出してから文壇は約十年に垂々とする。そして未明なんていふ人はまだそんな事を書いて居る、（中略）君等の衆愚と罵つて居る多数の民衆さへも、もつと深い、大きな、意義のある煩悶をし、もつと自由な、幸福な、合理的な生活をなさんとして、惨ましい犠牲を払ひつゝ努力を続けて居るではない乎。こんなものが小説なら、愚痴な女の泣言は不朽の傑作だ。

（寒）「二月の小説」

荒畑は、「文壇」においてなされる「生活が苦しい、家庭が面白くない」等々の日常生活に根差した発話を、「愚痴な女の泣言」以下のものとして切り捨てている。「文壇」で流通する「愚痴」のような文学作品に対する仮借ない批判には、荒畑の当時の文学観が表れている。荒畑は「藝術か戦闘か」⁽²⁷⁾においても「多くの創作家は、未だに無関心と耽美の夢から覚めない。彼等が

江戸時代の追想に酔ふて居る時、時勢は如何に先覚者の犠牲に依て進歩しつゝある乎。彼等が只管に耽美の夢を追ふて居る時社会は如何に衆愚の努力に依て進歩しつゝあるか」とし、「不義と戦ひ奸悪に反抗する勇氣が無い」ような文学者たちを追及している。それらの批判対象の文学者を攻撃する際に、相手の言語を「文学」にいたらしめ日常的な発話、すなわち「愚痴」に括りこむという戦術が採用されていたのである。

また論敵を批判する際に相手の言説を愚痴に振り分ける戦術とは対照的に、自分自身の革命家としての未熟さを、なかば自虐的に愚痴と位置づけていく言説も、雑誌『近代思想』には掲載されている。社会主義運動とは一定の距離を保ちつつ、『近代思想』の執筆陣に加わっていた生方敏郎は「虫けらの心——大杉兄へ——」を、一九一三年九月の『近代思想』に発表している。

無暗に情けなくなつたんだ。

元来俺はバカだと云ふこと、

生まれてから今日まで何をクダらぬことをして来たらうと云ふこと、

平凡で単調な、苦も楽もない此生活

いつまで行つたら何うなるだらうと云ふこと、

近所の人は皆理屈ばかり云つてやがるし、

卅日には勘定とりにきやがるし。

俺はつい先達までこんなグチは思はなかつた

今月は午の一白水。星が悪いに違ひない。

（生方敏郎「虫けらの心——大杉兄へ——」）

「あはれ、このむだ花の蜜をあさる／虫けらの徒の存在を許せ。」という文句からはまるこの詩は、前月号の『近代思想』に発表された大杉栄の詩「むだ花」の「むだ花の蜜をあさる虫けらの徒よ」という文句に対する応答となつている。大杉の「むだ花」が「生のあきらめ」を胸に抱え、「生の闘ひ」を回避する人々を嘲つた詩であつたのに対し、生方はその批判を内面化し、自らの日常生活の維持に汲々とするありさまを「こんなグチ」として露骨的に自己言及している。換言するならば、自身に与えられるであろう「こんなグチ」という他者からの糾弾を先取りし、自ら言語化するという構図である。

さて『近代思想』に発表された創作において、愚痴はどのよう表現されたのだろうか。荒畑寒村訳「主の家にて」³⁰には、貧しく惨めな村の老祭司神父ジョンが村人の悔悛の秘跡を促す場面が描かれている。

『聖なる父、わたしの罪は多うございます。わたしには何から云ひ出して宜いやら、解らない位です……。わたしを助けて下さい……。わたしに尋ねて下さい。』

『あなたは神の全知なる命令に就て、愚痴をこぼした事がありますか。』

教父ジョンは、やや迫り来る暗黒に因て隠されて居る、屋根のヒズと、不完全とを見上げた時、こう聞き始めた。

『はい、聖なる父、わたしは懺悔します。わたしは愚痴をこぼし、苦情を申しました。そして私は大いなる罪人でございます。』彼女の唇は、痙攣的に動き、焦がすやうな涙は、その黒い皺寄つた頬を押し流れるのである。

（荒畑寒村訳「主の家にて」）

帝政期ロシアを舞台にしたこの作品は、圧政下にあつて宗教に頼るほかない貧しい人々を描いている。そのなかで「愚痴」は「大いなる罪人」による発話ジャンルとして告解されている。むろん、本作が作者不明の翻訳作品であり、舞台が日本でないことを考慮に入れてもなお、前近代的で「無智」とされた登場人物の発話として愚痴が位置づけられることの効果は見逃すことができないだろう。

さて一九一四年九月、第一次『近代思想』は廃刊となる。そして同年一〇月より創刊された『平民新聞』が大杉らの主な活動の舞台となるが、発禁が相次ぎわずか六号をもつて廃刊となってしまう。そこで再度、一九一五年一〇月より第二次『近代思想』として復刊されることとなる。この際に、執筆者として宮嶋資夫も加わっている。

第二次『近代思想』においては、以前よりその傾向がみられた愚痴への対決姿勢が、さらに先鋭化されることとなる。一九一五年一〇月号に掲載された荒畑寒村「英国大罷工の背後」⁽³¹⁾においては、南ウエールズの坑夫によるストライキに慌てふためくジャーナリズムに対し「彼の紳士閥新聞の愚痴を軽蔑を嗤ふのである」と所見が述べられ、ブルジョアジーのメディアが「愚痴」として位置づけられている。

また同号に掲載されている「僕等の生活」と題された記事には、『近代思想』を愛読する労働者たちの手記が並んでいる。それらの『近代思想』の読者である労働者たちの告白は、まさしく愚痴をめぐる言語戦術を、理想的に内面化したものであつたといえよう。たとえば「最も手近な敵」と小題の付されたある職工の手記⁽³²⁾では、食事の際の事務員と職工の待遇の違いへの不満が述べられている。

職工の不平が耳に入つたと見えて、重役が以後一切の平等を宣言せられ（表面だけにしても）事務員殿もコンクリートの上で腰掛で食事することにされた。二人の事務員がこの愚痴をこぼして、『第一田中のやつなぞが職工の癖に生意気が過ぎる』といった言葉が終らない中に、二人の会話を遮つたのは年若き労働者である。（中略）是が僕の会社での事務員である。けれども、こんな横暴は、僕の会社の事務員のみに限るのだろうか。そして吾々労働者の最も手

近な敵は、先づ此等の事務員ではあるまいか。

（僕等の生活）

この手記において職工の不満の発話は「不平」であり、「手近な敵」として見做された事務員の発話は「愚痴」として、その発話のジャンルが明確に峻別されている。読者もまた、『近代思想』にあらわれた日常言語をめぐる戦術を学習し、労働者としての立場からそれを行使するさまが看取されるだろう。日常言語をめぐる戦術において、この職工と『坑夫』の石井金次との距離は接近しているのだ。

そして本節の最後に、『近代思想』において最も明確な形で日常言語への介入を図った論考として、『坑夫』の刊行と同じ一九一六年一月に掲載された荒川義英「反逆者と不平家」に触れておきたい。ジョルジュ・パランド著、大杉栄訳「叛逆者の心理」の影響下に書かれたこの論考は、「反逆者」と「不平家」概念の差別化が試みられている。社会の不均衡に接した際に、「最も精悍なるものは一挙に此の不均衡を矯正しやうとする。是即ち反逆者である」とされ、その対極に在る「最も意気地なきものは、最後まで、持ちこたへて黙つて墓へ持ち込んでしまふ」という。そして、その中間に位置する存在が「不平家」であると荒川は規定している。

況して此の、不平家の場合になると、愚痴をこぼす事が甚

だ大きな快感となるのである。自己の弱点を語ることが、最も好い鞭撻であるとの誤算の下に、次第に自己の弱点を誇大に発表することを厭ぶ。然るに是は、実は自己の行為の向上の苦闘に対する予防である場合が多い。

（荒川義英「反逆者と不平家」）

荒川の論考は、「反逆者」に到達することができず、自己の弱さを表白することを目的化してしまつた「不平家」の発話を「愚痴」として定義している。それに対する「反逆者」は、「あまり深く自己の行為を説明しない」寡黙な存在として定義される。ここには『坑夫』における饒舌に愚痴をこぼす不平家の坑夫たちと、沈黙を守る反逆者としての石井金次といった構図を重ねることができよう。

以上、考察してきたように、近代思想社の批評言説では、日常言語ことに愚痴への積極的な介入がなされてきた。『坑夫』における石井の愚痴への嫌悪と抗争は、ともすれば登場人物の生得的な気質へと回収されがちであるが、実はこうした近代思想社におけるディスコースの布置のもとに成立していたのである。

4 足尾鉾山暴動の時間

日常生活に根ざした発話である愚痴は、「人間の弱点、少し

く失敗」をすると「愚痴の百遍も繰返」⁽³⁵⁾すと語られるように、失敗者や敗残者の発話という側面も有している。⁽³⁶⁾『坑夫』に描かれる鉱山労働者たちの一部は、一九〇七年の足尾銅山暴動において敗北した人々であった。棚沢健は、『坑夫』が「足尾銅山暴動を物語の背景に、そして暴動以降をテーマにしつつ、「暴徒」として語られた坑夫に焦点をあてる」作品であったと指摘している。

一九〇七年二月四日、賃上げをめぐる交渉がこじれた足尾銅山に火の手が上がった。その第一報を当時の新聞記事は次のように伝えている。

足尾銅山坑夫は、過日来しきりに賃金引上げ運動をなし居りしが、事ついに破裂し、今四日午前九時半、同鉱山通洞内一番坑内に在りし坑夫五百余名、同二番坑内に今朝入坑したる坑夫四百余名、都合九百余名合体して、外部へ通信の出来ざるよう電線を残らず切断し、坑内を暗黒にし、すべての見張所を爆裂弾にて破壊し、すこぶる大騒擾を極め、同時に四百余名の坑夫、郊外に密集して熾んに声援を与え、暗黒なる坑内は実に悲惨なる修羅場と化せり。足尾分署の警察官総出、取り鎮めに尽力せるもなんらの効なし。

(賃上げこじれ、坑夫九百人が暴動)⁽³⁸⁾

この暴動で足尾銅山は全山廃墟と化すことになった。ことを

重く見た政府の指示により二月七日、高崎歩兵第一五連隊は三個中隊を組織し、⁽³⁹⁾ただちに足尾銅山に派兵を行う。さらに戒厳令が敷かれ、足尾坑夫約六百名が検挙される形でようやく収束に至ることとなった。『坑夫』の石井金次は、かつて足尾銅山暴動の英雄であった。

野州の山に大暴動の起つた時も、生れつきしな／＼と機敏な身体を持った彼れは、暴動の主唱者よりも勇敢に闘つた。手から離れると直ぐ爆発する導火線の短いダイナマイトを投げつけ、家を焼き人を傷つけて、血と火の漲る叫喚の裡に、全身に充ち渡つた反抗の念を溶け込ませたが、怖ろしい軍隊の力に圧迫されて重だつた者の多くが捉へられたときも、素敏い彼れは、山伝ひに巧みに逃げ終せた。

『坑夫』

この暴動を鎮圧するために動員された「怖ろしい軍隊の力」は、坑夫たちの労働によって産出されたタンクステン製の武器によって支えられていたということに、この時代の坑夫が置かれた残酷な疎外状況が浮かび上がる。そして石井は大半の坑夫たちが検挙されるなかで、軍隊の手を免れ「山伝ひに巧みに逃げ終せ」ることができた暴動の生き残りであった。『坑夫』の冒頭で佐藤に対して「もうそろ／＼野州花も咲き出すから、足尾坑夫も巣立ちをする時分だなあ」と語っているように、国家

権力の包囲網を潜り抜けて検挙を免れた石井は、今なお足尾銅山の暴動の時間を生きているのである。

一方で、軍隊の力をありありと見せつけられ敗北を味わった坑夫たちは、弱々しい敗残者としての存在と化すこととなる。本論の冒頭で触れた知久泰盛は、足尾鉾山暴動後の弱々しい坑夫たちの姿を目にした驚きを、次のように書きとめている。

予は坑夫生活を為して数日の後殆ど生命がけの仕事をしてゐるこの労働者に想像した程の放胆な気力の無いのに一驚した彼等は他の労働者の空元気でも威勢の好いのに引きかへ雌猫のやうに穏かなのだ斯うした人々が嘗て去四十年の暴動を起した杯とは思ひも寄らぬ事であつた。

（知久泰盛「足尾銅山鉾夫となるの記」⁽¹⁰⁾）

こうした点を見るならば、『坑夫』において足尾暴動の時間を生き続ける石井金次と、暴動鎮圧後の時間を生きた坑夫たちのディスコミュニケーションこそ、『坑夫』における愚痴をめぐる葛藤の基底にあったと考えられる。

過酷な労働環境に対して愚痴をこぼすのをやめ、「ダイ」を資本家に投げつけるという選択肢は、物語のわずか数年前には、現実にあつたものであつた。しかし坑夫の気質や鉾山労働をめぐる制度も、足尾銅山暴動を境に変容してしまうこととなる。

二村一夫の研究⁽¹¹⁾によれば、足尾銅山暴動後、資本家の手により徳川時代以来の伝統を持つ友子同盟と飯場制度の改組・再編が行われることとなった。さらに石井金次のような渡り坑夫たちは、暴動後に取り締まりの対象として警察に睨まれる存在となったのである。⁽¹²⁾

一九〇七年の足尾銅山暴動を境に、日本の鉾山労働の環境は大きく変化することとなった。『坑夫』に描かれた鉾山労働者たちの日常生活の愚痴の背後には、こうした暴動の敗北の記憶が流れているのである。

5 おわりに

本稿では、鉾山労働者たちの愚痴の分析を通して、『坑夫』における日常言語をめぐる葛藤を読み解いてきた。『坑夫』においては、労働者たちの発話をどのようなジャンルに分類するかをめぐる暗闘がなされていた。そして日常生活の悲哀を嘆く労働者たちの発話は、石井金次によって「愚痴」や「泣き言」に分類され、聞くに値しないものとして処理されてしまう。資本家との直接的な闘争ではなく、こうした労働者たちの日常言語への介入こそが、『坑夫』で描かれた運動戦術なのであつた。さらに『坑夫』におけるこうした日常言語への介入は、「反逆者」の発話と「不平家」の発話を峻別し、後者を「愚痴」と分類して退ける近代思想社のメディア戦略を引き受けたものであつた。

そして愚痴が敗北者や失敗者の發話であるという意味において、『坑夫』に描かれた愚痴には、一九〇七年の足尾銅山暴動の敗北の記憶が流れ込んでいる。

見方を変えるならば『坑夫』に描き込まれているのは、石井金次に形象化された近代思想社の理想主義が、運動に転化することが困難な労働者たちの日常的不満を、「愚痴」や「泣き言」として酷薄に切り捨ててしまう過程であった。小説の末尾で語られる石井の破滅は、そうした介入戦術に伴う孤独が、必然的に招いてしまった悲劇的結末である。それを鉱山労働者たちの「卑屈」な氣質に短絡するのではなく、日常言語をめぐる闘争の場において捉えなおすことにより、本作の持つ可能性の一端が開かれると考えている。⁽¹³⁾

注

- (1) 知久泰盛「足尾銅山鉱夫となるの記」、『人生探訪変装記』、一九一四年一月、互盟社。
- (2) 江見水蔭「足尾銅山坑夫の話」、『避暑の友』、一九〇〇年五月、博文館。
- (3) 平沢計七「坑夫の生活」、『労働者の叫び』、一九一九年六月。
- (4) 宮嶋資夫『坑夫』、一九一六年一月、近代思想社。なお引用は、『宮嶋資夫著作集 第一巻』(一九八三年四月、慶友社)に依った。
- (5) 堺利彦『坑夫』の序、『坑夫』、一九一六年一月、近代思想社。引用は、『宮嶋資夫著『坑夫』復刻版』(一九九二年七月、法政大学西田勝研究室・不二出版)に依った。

- (6) 大杉栄「序」、『坑夫』、一九一六年一月、近代思想社。引用は、『宮嶋資夫著『坑夫』復刻版』に依った。

- (7) 『坑夫』出版広告、『近代思想』、一九一五年二月。

- (8) 佐藤勝『坑夫』論、『日本近代文学』、一九六五年一月。

- (9) 森山重雄「宮嶋資夫論——刃物の思想——」、『実行と藝術——大正アナーキズムと文学——』、一九六九年六月、塙書房。

- (10) 中山和子「宮嶋資夫論」、『文学』、一九六五年十一月。

- (11) 森山重雄「宮嶋資夫」、『日本文学』、一九六二年一〇月。

- (12) 『坑夫』をめぐる論争については、黒古一夫「宮嶋資夫序説——「日常性」の喪失——『大正労働文学研究』、一九七八年一〇月)に詳しい。

- (13) 中村三春「宮嶋資夫『坑夫』における〈沈鬱〉の様態——「カインの末裔」を補助線として——」、『日本文化研究所研究報告』、一九八七年一月。

- (14) 千葉正昭「宮嶋資夫『坑夫』の《獣性》——大正労働文学の嚆矢——」、『解釈』、二〇〇四年二月。ならびに「宮嶋資夫『坑夫』の超人性／獣性」、『国文学』、二〇〇九年一月。

- (15) 注12参照。

- (16) 田上貞一郎「宮嶋資夫『坑夫』の舞台」、『解釈』、一九七三年一月。

- (17) 黒古一夫編「宮嶋資夫年譜」、『宮嶋資夫著作集 第七巻』、一九八三年一月、慶友社。

- (18) 豊原信一郎『タングステンとモリブデン』、一九一六年五月、工学書院。

(19) 「重石と水鉛」、『時事新報』、一九一五年一〇月五日。

(20) 「勃興せる重石採掘業」、『大阪朝日新聞』山陽版、一九一六年八月一七日。

(21) 佐藤勝「坑夫」補注四七、『日本近代文学大系五一 近代社会主義文学集』、一九七一年九月、角川書店。

(22) 堺利彦「大杉君と僕」、『近代思想』、一九一四年九月。

(23) 村田裕和『近代思想社と大正期ナショナリズムの時代』、二〇一一年三月、双文社出版。

(24) 寒（荒畑寒村）「九月の小説」、『近代思想』、一九一二年一〇月。

(25) 赤木桁平『遊蕩文学』の撲滅、『読売新聞』、一九一六年八月六・八日。なお、『遊蕩文学』の撲滅が収録された評論集『藝術上の理想主義』（一九一六年一〇月、洛陽堂）の「自序に代へて」において、赤木は次のように述べている。

予等が、夢寝の間にも猶ほ覺めてゐるものは、今すこしく生命の根底に突込んだ藝術である。言葉を変へていふと、一時の流行や、一時の好尚に支配されないだけの恒久性を保証された藝術である。かういふ意味の藝術は、疑ひもなく追懷哀愁のみをこゝとする情緒中心の藝術でもなければ、また愚痴愁訴をのみこゝとする生活中心の藝術でもない。

ここでもまた、「愚痴」が論敵を批判する際のキーワードとして機能している点は、見逃せないだろう。

(26) 寒（荒畑寒村）「二月の小説」、『近代思想』、一九一三年三月。

(27) 荒畑寒村「藝術か戦闘か」、『近代思想』、一九一三年三月。

(28) 生方敏郎「虫けらの心——大杉兄へ——」、『近代思想』、

一九一三年九月。

(29) 大杉栄「むだ花」、『近代思想』、一九一三年八月。

(30) 荒畑寒村訳「主の家にて」、『近代思想』、一九一四年四月。

(31) 荒畑寒村「英国大罷工の背後」、『近代思想』、一九一五年一月。

(32) 「僕等の生活」、『近代思想』、一九一五年一月。

(33) 荒川義英「反逆者と不平家」、『近代思想』、一九一六年一月。

(34) 大杉栄「叛逆者の心理——ジョルジュ・パランド——」、『近代思想』、一九一四年四月。

(35) 今井雷堂『修養その日その日』、一九一二年二月、応来社。

(36) 一方で野中進は、ジャンルとしての愚痴の分析において、「愚痴によって開示される内奥とは「弱さ」のことに他ならない。（ただし内面が弱いのではなく弱さが内面化されるのだが）」（「愚痴について バフチンの「ことばのジャンル」論より」、『埼玉大学紀要』二〇〇二年三月）と述べている。あらかじめ抱えていた弱さを吐露するから愚痴なのか、愚痴を通して弱さが内面化されるのかはここでは決しかねるが、いずれにせよ愚痴は「弱者」や「敗残者」に関わる発話なのである。

(37) 棚沢健「大正五年の坑夫——宮嶋資夫『坑夫』論——」、『国文学研究』、一九九七年一〇月。

(38) 「賃上げこじれ、坑夫九百人が暴動」、『東京朝日新聞』、一九〇七年二月五日。

(39) 「暴動ますます激化、軍隊三個中隊到着」、『時事新報』、一九〇七年二月八日。

(40) 注1参照。

(41) 二村一夫『足尾暴動の史的分析 鉱山労働者の社会史』、一九八八年五月、東京大学出版会。

(42) 『渡坑夫取締』、『大阪朝日新聞』、一九〇七年七月四日。

(43) 作者の宮嶋資夫に関しては、後年「愚・痴」(『仏門に入りて』、一九三〇年一〇月、創元社)という文章を執筆し、そこで次のように述べている。

カン口具をはめられた犬みたいに、餌も食へなければ喋れもしないこんな生活が、嗚呼いつまで続くのか。／云へる事は愚痴だけだ、愚痴ならば、先づ差支へないだらう。これが出版物取締と云ふ規則だから。／愚痴も云ひたくなくなつてしまつた時は、僕等は何をしたら好いか考へる。／それにしても如何に愚痴ばかり多い事か。／全く空を仰いで悠然と息をつきたくて堪らなくなつてくる。／が然し、これも一つの愚痴に過ぎない。

運動が困難な状況に際して再び宮嶋が「愚痴」の問題に向きあつたことは、興味深い事実であるが、本格的な考察には別稿を要する。

附記

引用に際して、漢字は旧字から新字に改めた。また「」内は引用者による注、／は改行を示している。本稿は二〇一五年二月二七日に立命館大学衣笠キャンパスにて開催された、第二一回占領開拓期文化研究会での口頭発表の内容を大幅に修正したものである。また発表に際しては、多くの貴重なご教示をいただいた。ここに記して感謝を申し上げたい。